第一章

　午後十一時五七分。最終電車を待つ、
そのプラットホームに人の姿はまばらにしかなかった。
彼らのほとんどは中年のサラリーマンで、
足元もおぼつかないほどの酔客ばかりだ。

　屋根を支える支柱によりかかってうたた寝している者、
ベンチに横たわって失禁している者、
冷たいコンクリートの地面に座りこんで大声でグダをまいている者、
ホームから線路(せんろ)に向かって、
おじぎをするように身体を折り曲げながら
ゲロを吐き出している者もいる。

　そんな醜態をさらす中年のオヤジたちに、
時折、侮蔑の視線を送りながら鼻で嘲笑っている少女がいた。
白いブラウスにブルーのネクタイ、
太ももも露わなチェック柄のミスカート。
肩には黒っぽいトートバッグを下げている。
おそらくどこかの女子高校生だろう、
そのトートバッグには校章らしきものが刺繍されていた。

Ｉpodで流行りの楽曲を聴きながら片足は軽くリズムを刻み、
口は絶えずガムを噛み続けている。

こんな深夜の駅のホームにいる女性は彼女一人だけだった。
まわりの男たちのまとわりつくような、
黄色く澱んだ視線に生理的な嫌悪感を感じながらも、
援助交際で醜悪なオヤジたちの相手をしている彼女にとっては
耐えられないほどのものではない。
中にはスケベ心をむき出しにして近寄る酔っ払いもいたが、
彼女の迫力あるガン飛ばしを喰らうと、すごすごと離れていく。

　援助交際といえば、そもそもそれが原因で
普段は乗ることのない、こんな最終電車で帰るはめになったのだ。
　いつもデートの帰りは、相手に車で自宅まで送ってもらう。
車を持っていない男とは付き合わない。それが彼女の主義だ。

　今付き合っているのはマサユキという大学生。
彼女好みのイケメンなのだが、年中金欠の男だった。
実家からの仕送りにバイトもしているので、はた目には余裕がありそうだったが、
その金のほとんどを車にかけていて、デートにかかる費用はほぼ全額、
彼女が出していたのだった。
　そうなると当然彼女も金に困ってくる。そこで思いついたのが援助交際だ。
これなら手っ取り早く金が稼げる。
薄汚いオヤジと安ホテルで寝るだけで数万円の金が手に入るのだ。

　時給８００円のコンビニのバイトなんかで、ちんたら稼ぐのなんてごめんだった。
だいたい人に使われるのなんか性に合わない。
彼女は常に他人より優位に立ちたい性格だった。
援助交際だったら、オヤジたちは自分の身体欲しさに言いなりに大金を出す。
メタボリック症候群の豚のような男たちに抱かれながらも、
心の中で彼らを嘲笑い見下していた。

　その援助交際がマサユキにバレてしまったのだ。
今日のデートの帰り際、マサユキは彼女がいつも数万の現金を持っていることを
不審に思っていて、今までになくしつこく問いただしてきた。
前から何度か金の出所を訊かれてはいたが、
それに対して親からもらったお小遣いだと答えていた。
だが付き合いが長くなるにつれて、互いの素性もわかってくる。
彼女の父親は中小企業のサラリーマンで、
母親もパートで働いていることをマサユキは彼女の口から聞いている。
数万もの金をたびたび娘に与えるほど裕福ではないはずだ。

　それに彼女がバイトをしていないことも知っている。
そして普通のバイトなど出来ないだろう性格だということも。

　マサユキのあまりにしつこい追求に彼女もついに根をあげた。
真実を知ったマサユキは逆上し彼女の頬をぶった。それには彼女もキレた。
彼女にも言い分はあった。
車ばかりにお金をかけて、満足にデートも出来ないのは、
そもそもマサユキのせいなのだ。
原因は彼にあって自分にはすこしも非はなく、
ぶたれるような理由はないと彼女は思っていた。

　彼女はマサユキの車を降りると、
ドアミラーにトートバッグを叩きつけてへし折り、その場から走り去った。
ドアミラーの惨状にパニックになったマサユキの悲鳴が、
背後から響いてきたのを覚えている。

　本当はタクシーで帰りたかったのだが、財布には三千円ほどしかなかった。
今日のデートで使い果たしてしまい、
それでこんな最終電車に乗らなければならないことになってしまったのだ。

　胸ポケットの携帯が着メロを奏でた。
マサユキからだ。ウザそうに顔をしかめると、携帯を開いてメールを読んだ。
そこには破壊されたドアミラーの恨みつらみが書き連ねてある。
謝罪要求と弁償請求。

（誰があやまるもんか。弁償？ざけんなよ。
だったらこっちも今までの飯代、遊び代、ホテル代請求してやる）

　携帯を閉じポケットにねじ込んだ。
ガムを膨らませパチンと潰す。まるでそれを合図にしたかのように、
ホーム内にアナウンスが流れた。

『３番乗り場に十二時四分発下り電車が入ります。黄色い線の内側に立って・・・』

　彼女はそんなアナウンスに耳も貸さず、黄色い線から半歩踏み出した。
ホーム内のけたたましいベルの音に負けじと、ｉポッドの音量を上げる。
　それに気を取られたのか、彼女は自分の背後に近づく人の気配に気づくのが遅れた。

　（またスケベオヤジかよ）

ため息混じりに振り向くのと、
その人影が勢いよく彼女の両肩を突き飛ばすのがほとんど同時だった。

彼女は何が起こったのかわからず、
キョトンとした表情を顔に貼り付けたまま半回転してホームから落下していった。
その直後、最終電車が彼女の身体の上を通過した。

三十メートルも飛ばされた彼女の携帯がメールの着信音を鳴らす。

「Ｔｏ 好恵
援交のことは水にながしてあげるからさあ　またつきあおうぜ
でもさ　ドアミラーはちゃんとべんしょうしてくれよお
マサユキ」

第二章

九月半ばになっても降り注ぐ熱を帯びた陽光は、
まだ夏が終わってないことを体感させた。
十四階建てマンションの六階、ダイニングキッチンのテーブルで、
亜希子は制服姿でミルクとバターをたっぷり塗ったトースト、
それとスクランブルエッグにパクついていた。

「今頃になってもこの暑さだなんて、
これも地球温暖化の影響かしら」

強い日差しに目を細めながら、レースのカーテン越しに外を見て
母親の由実が言った。

「今日は打ち合わせで遅くなるから、
帰ったら冷蔵庫の中のハンバーグ温めて食べてて。
それとサラダも作ってるからそれも一緒にね」

「わかってる」

いつものことだという感じで亜希子は答えた。

由実とこの２ＬＤＫのマンションで、
二人きりの生活を始めてもう四年になる。
亜希子の両親は、彼女が中学二年生の時に離婚した。
離婚する夫婦がめずらしくないご時世とはいえ、
自分自身に起きてみるとやはり衝撃的な出来事だった。

父親である山村希一は大手広告代理店の営業部長で、
母親の由実は希一とは別会社でマーケティング・コンサルタントをしていた。
互いに同じ業界で同じような仕事をしていたため、
夫婦で共有する時間も取れず、すれ違いが多かった。

中学の頃の亜希子自身も、家族三人で遊びに行ったり、
食事をしたりした記憶はほとんどない。
父と母の間に流れる希薄さは、彼女なりに敏感に感じ取っていた。

離婚を決定づけたのは、父の希一に「女性」ができたことだった。
それも単なる浮気ではなかった。
希一は由実に離婚を求め、しかるのち、その女性と再婚したからだ。

相手の女性は希一の会社の取引先の秘書らしかった。
妻である由実と過ごす時間より、
その秘書との時間の方が長かったということかーーー。

かつて由実と結婚した時も似たようなきっかけだった。
当時、とある企業の新商品のマーケティングを任された希一は、
由実が勤めていたデザイン会社に企画・立案を依頼した。
その時、その仕事を担当することになった彼女と知り合い、
仕事の打ち合わせをしているうちに付き合うようになって結婚したのだ。

（パパは淋しがりやなのかも・・・）

亜希子は今でもそう思っている。
それに対して由実の方は違った。

もともと男勝りで、さばさばした性格の由実は、
希一に離婚を切り出された時もあっさりとそれを承諾した。
そして亜希子の親権を主張し、
慰謝料と養育費の確約を取ると、離婚届に判を押した。

相反する性格の二人であったが、
共通していたことがひとつあった。

それは一人娘である亜希子の気持ちをまったく考えていないことだった・・・。

「すこし口紅キツいかな？」

由実が亜希子の前にかがみ、唇を突き出す。

「う～ん、ちょっとグロスが強すぎるかも」

「でもこれが流行ってんのよ。知らなかった？」

（だったら訊かなきゃいいじゃない）

亜希子は口をとがらせた。
由実は仕事でもプライベートでもオシャレを欠かさない。それに美人だ。
とても四六歳には見えず、十歳以上若く見られることもしばしばだった。
そんな母親を亜希子は内心、誇りに思っている。
カタカナ職業のキャリアウーマンで、女優のような美人のシングルマザー。
流行りのドラマの中にしか存在しないような女性なのだ。

亜希子も美人ではあったが、由実のような派手さはなかった。
どちらかというと父親似で、
おとなしめの和風美人といったところか。
それに今は黒ぶちのメガネをかけていて、彼女をことさら地味に見せていた。
由実も娘がそんなダサいメガネをしていることが不満で、
コンタクトを強くすすめているのだが、亜希子がそれを頑強に拒否していた。
彼女がそのメガネにこだわるのは特別な理由があったのだが、
そのことを由実には打ち明けてはいない。

「それじゃ、ママ行ってくるわね」

パタパタと玄関へと向かう。亜希子も見送りに後をついていく。
今日はディオールのスーツにプラダのショルダーバッグだ。香水はエスカーダ。
エルメスのハイヒールを履くと身長は百七十センチ近くなる。

「いってらっしゃぁ〜い」

亜希子がけだるく手を振る。それをチラと振り向き、
口元で微笑みながら由実は出かけて行った。

亜希子も手早く朝食を済ませると、
カップとソーサーを流し台へと運んだ。
バッグを肩にかけると手鏡で髪形を簡単にチェックする。
腕時計をつけ、時報代わりに付けっぱなしにしていた、
テレビのスイッチをオフにしようとリモコンに手をのばす。

壮年の人気タレントが司会をしている、
朝の情報番組が映っていた。

その中の各局別のニュース・コーナーで事故のニュースが流れる。
何気なく亜希子は手を止めた。

『ＸＸ本線で１２日深夜、
午前０時４分発〇〇線下り列車に、ホームから人が転落しはねられ、
死亡するという人身事故がありました。
死亡したのは私立高校に通う、菅野好恵さん１７歳と判明しました。
この事故で同列車は発車が１時間ほど遅れ・・・』

亜希子の手はリモコンに触れようとしたまま、
凍りついたように固まっていた。

スガノ・・・ヨシエ・・・

この名は亜希子の記憶に深く刻み込まれている。
忘れることは決してない名前。

あれは四年前、まだ両親と家族３人で
暮らしていた頃の忌まわしき思い出。
思い出すたびに胸が締め付けられる。

亜希子の動悸が激しくなった・・・

第三章

亜希子は中学二年生の夏まで山村亜希子という名前だった。
それが両親の離婚で母親に引き取られ、
由実の旧姓の日向に変わったのだ。

それは亜希子の苗字が変わったと同時に始まった。

いじめである。

いったいなぜ自分がいじめられることになったのか、
はっきりした原因は未だ亜希子にはわからない。

当時、亜希子には仲の良かったグループがあった。
そのリーダー的立場にいたのが菅野好恵である。
好恵は気が強くわがままな性格で、
クラスの中でも目立った存在だった。

つりあがっていて冷たい印象を与えるが、
他人をひきつけるぱっちりした大きな目。
肌はいつも日焼けサロンで焼いているらしく艶やかな小麦色で、
すこし厚めの唇はピンク色の口紅に彩られ、
年齢からは不相応な色っぽさを醸し出していた。
当然、彼女には男の子の取り巻きも多く、
まるで女王のようにふるまっていた。

そんな好恵と内向的な亜希子が
どうして友達になったのか・・・。
先に近づいてきたのは好恵の方だった。
亜希子も彼女に憧れていたところもあって、
好恵の誘いを受け入れた。
もっとも好恵には亜希子と友達になる
明確な理由があったのだ。

クラス内でも下位の成績であった好恵は、
クラス一の秀才であった亜希子に

勉強を教えてもらおうという思惑があった。
というよりもテストのヤマを知りたかった
といったほうが正しいかもしれない。
しかし亜希子がせっかくヤマを教えても、
その問題を解く肝心の学力が好恵にはなかった。
というのも、根気のない性分の好恵は
いくら熱心に亜希子が勉強を教えても、
学ぼうという意欲が微塵もなかったからだ。

亜希子と好恵の仲は、しばらくはうまくいっていた。
ところが亜希子の両親が離婚する頃から、
好恵の態度が豹変したのだ。

最初は些細なことから始まった。
ある日の昼食の時、
好恵がグループ４人分のパンと飲み物を、
購買部で買って来るよう亜希子に頼んできたのだ。

はじめは頼んでいたのだが、
次第にそれが命令口調になった。
そして次には自分達のパン代、
飲み物代を亜希子にたかるようになった。

亜希子はそれを拒んだ。
すると好恵達は、彼女を無視するようになったのだ。

クラスでも中心的な
グループのボスである好恵達がそうすると、
他のグループ達もそれにならうように
亜希子を無視し始めた。
それまで仲の良かった友人もよそよそしくなり、
亜希子と視線さえ合わさないようになる。
ひと月もしないうちに
亜希子はクラス中から無視されるようになった。

他のクラスにも亜希子の友達や後輩はいたが、
好恵の力はそこにまで及んだ。

亜希子は学校にいる間中、
誰とも会話をしない日が続くようになった。

好恵達が亜希子に話しかける時は
金を要求する時だけだった。
だが亜希子はどんなに脅迫されても、
かたくなにそれを拒否した。
すると好恵達のいじめはさらに
エスカレートしていった。

机や教科書に油性マジックででかでかと、
“お前最悪”とか“死ね”と
書かれるようになったのだ。
犯人は好恵達に決まっていた。
以前、好恵達に勉強を教えていた頃に、
彼女達の筆跡はだいだい覚えていたからだ。

亜希子は母親の由実にこのことを相談しなかった。
というより相談する気が起きなかった。
というのも当時離婚したばかりで、
女手ひとつで亜希子を育てると決心し、
今まで以上に仕事に力を注いでいる由実に、
余計な心配をかけることができなかったのだ。

それで亜希子は担任の教師に相談した。
最初は「お前の勘違いだろう」と取り合わなかったが、
落書きされた教科書やノートを見せると、
今度は「お前にいじめられる原因があるんじゃないのか」
と言い出す始末だった。

中学を卒業後、うわさで知ったことだが、
その頃すでに好恵達は援助交際をやっており、
その担任教師も好恵達と関係していたらしいのだ。
好恵に弱みを握られている担任が、
彼女達に対して、強い態度ができないのも当然だった。
亜希子は夜、ひとりで泣くようになった。

自殺という言葉さえ頭に浮かんだ。
でもその一方で、
どうして私がこんなことのために
死ななければならないのか、
という理不尽さに怒りを覚え、それを頭から振り払った。
しかし問題を解決する方法が
見つからないこという現実は消せなかった。

その事実に亜希子は怯え、震えた。
そして動悸が激しくなり、手が震え、
身動きができないほど
全身が痺れたように
動けなくなる発作に見舞われるようになった。

パニック症候群（シンドローム）である。

パニック症候群とはパニック障害とも言われており、
めまい、動悸、呼吸が苦しくなる、
手足がしびれる、吐き気や呼吸困難、
このまま死ぬのではないか、狂ってしまうのではないか、
という恐怖に襲われる症状が突然起こる病気のことで、
原因は強烈な精神的ショックともいわれている近代病である。

亜希子はいじめにあって
この病気に悩まされることになったのだ。
あれから四年経った今でも症状は治まらなかった。

亜希子はリモコンを操作し、
テレビのスイッチをオフにした。
動悸はますます激しくなっていく。
震える手でバッグからタブレットケースを取り出し、
ふたを開け軽く振る。
白く小さな錠剤が一錠、手のひらに転がった。
それを口に含み、ミネラルウオーターをコップに注ぐと、
一気に飲み下す。
それは精神科医に処方された精神安定剤だった。
この薬がなければ、

亜希子は一切の行動ができなくなってしまうのだ。

しばらくすると動悸は治まってきた。
深呼吸をして、ゆっくりと呼吸を整える。
腕時計を見ると７時半をすでに回っている。
亜希子はバッグを肩に担ぐと玄関へ急いだ。
あわただしく靴を履き外に出る。
ドアの鍵をかけてエレベーターへ向かいながらも、
菅野好恵の事故のことが頭の中をよぎる。

本当に事故なのかーーー？

そういう疑問が湧く理由が亜希子にはあった。

第四章

亜希子もいじめにあっていることに、
手をこまねいているわけではなかった。
だが担任の教師はあてにならないし、
かといって由実に相談する気もない。
しかし、自分の不安定な精神状態を癒すために
何かしなければと思った。
そうしなければ自殺の二文字が現実になりそうな気さえした。

そこで始めたのがブログである。

　母親の由実にとって
仕事上インターネットは必要不可欠であり、
自宅に一台のデスクトップ型パソコンと
小型のノートパソコンを置いていた。
その影響もあってか、
亜希子も小学生の頃からコンピューターに興味を持ち出し、
由実にしつこくねだって買ってもらったのだ。

ＯＳのバージョンアップごとに買い換えてもらい、
現在のパソコンで三台めである。
　だがいままでインターネットをしていても、
自分のブログを持つことは無かった。
そして初めて自分の管理するブログが、
こんな形になるとも思わなかった。

亜希子は自分のブログの中で、
学校のみんなに
いじめられていることを公表したのだ。
勿論、実名や学校名は伏せてある。
ハンドルネームは〈アキ〉と名乗った。

それは亜希子にとって良い結果となった。
亜希子は自分の置かれた状況をブログで公開し、
不特定多数の誰かに語りかけることで、
精神的なカタルシスを得た気がしたのだ。

実際に同じようにいじめられている境遇の人や、
過去にいじめられた体験をした人達からの励ましや
応援のコメントが多く寄せられた。
中には中傷的なコメントもあったが、ごくわずかであった。

それら亜希子を応援する人達の中に、彼女はいた。
彼女のハンドルネームは〈カコ〉。
〈カコ〉のコメントによれば、
彼女も亜希子と同じ歳で当時１３歳の女の子だった。
共通点はそれだけではない。
〈カコ〉も亜希子と同様にいじめにあっていたのだ。
彼女もかなり深刻(しんこく)な状況で、
自殺のことも考えていることを亜希子に告白していた。

亜希子と〈カコ〉はお互いのメールを交換し、
互いの悩みを打ち明ける仲になっていった。
そしてある日、〈カコ〉は
自分の顔写真を携帯へ送ってきた。

それはすこし上目使いでカメラを見つめている、
茶髪で肩までの長さのショートカット、
少しだけのぞいてる耳には
ハート型のピアスをつけている、
勝ち気で大きな瞳の女の子だった。

亜希子も自分の顔写真をメールで送った。
〈カコ〉は亜希子の透き通るような肌の白さと、
その上品な顔立ちをうらやましがっていた。

ふたりはつらいことがあるたびにメールを交換した。
当時の亜希子にとって、
〈カコ〉はただひとりの友達だった。
そのやり取りの中で、亜希子は〈カコ〉を励まし、
亜希子もまた〈カコ〉に勇気づけられた。
ふたりが互いに支え合う仲になるのに時間はかからなかった。

そんなある日、〈カコ〉が

ある携帯サイトを紹介してきたのだ。
そのサイトの名は〈呪会（じゅかい）〉。
それは会員制のサイトで、
〈呪会〉に登録されているメンバーでなければ
閲覧、書き込みができない。
会員にはそれぞれＩＤとパスワードが割り振られ、
必要なコードを打ち込まなければサイト内に入れない。
このサイトを管理しているのは、
ハンドルネームを〈Ｄ〉と名乗る人物だった。
そしてこの〈呪会〉の会員になるには、次のような条件があった。

１、現在、殺したいほど呪っている人物がいること。
２、他の会員の呪っている相手も同じように呪えること。
３、入会の際、一人以上、自分が呪う相手を登録すること。
４、呪会のことを他に漏らさぬこと。
５、生涯この呪会の会員であること。
６、死亡によってのみ、脱会が認められること。

これらの条件を承認し、そしてかつ、
呪会会員の紹介がなければ入会はできなかった。

〈カコ〉はその〈呪会〉への入会を勧めてきたのだ。
〈カコ〉はすでに〈呪会〉の会員であり、
自分が紹介するから心配いらないと言う。
亜希子は〈呪会〉というサイトに入ると
どんなメリットがあるのか尋ねた。
すると驚くべき答えが返ってきた。

会員一人一人の呪っている人物を登録し、
呪い殺していくというのだ。
〈呪い殺すリスト〉に書かれた人物を
会員全員で死ぬまで呪い続けるという・・・。

あまりに非現実的で実現しそうにないその行為に、
正直、亜希子は戸惑い、
疑念を抱いた。
だが〈カコ〉は多くの人が念じれば、

それは現実の力になると信じて疑わなかった。
事実、当時の〈呪会〉のメンバーはすでに３０００人を超えていた。

（それだけの数の人間が、呪いの念を送ればもしかして・・・）

当時、１３歳の少女であった亜希子の頭に、
そのような考えがよぎっても無理は無かった。
かといって本当に憎い相手を呪い殺したいかといえば、
ためらってしまう。

菅野好恵に対してもそうだ。
確かに好恵には、亜希子自身、
怒りや憎しみを抱いているのは否定できない。
だが実際に、好恵を殺したいかというと、
どうしてもそんな気持ちになれなかった。

真剣に悩んでいる亜希子とは対照的に、
〈カコ〉は軽く受け止めているようだった。
自分が憎んでいる相手を、
自分以外の人も一緒に呪ってくれる・・・。
それだけでその憎しみの対象に復讐した気分になれるというのだ。
勿論、人を呪い殺せると本気で信じている〈カコ〉は、
本当に〈呪い殺すリスト〉に書き込まれた人物が
死んでもかまわないようだった。

亜希子にもその気持ちがわからないわけでもなかった。
確かに冷静に考えればそうだ。
人を呪い殺すなんてできるはずがない・・・。

亜希子は〈カコ〉とは違い、
そんなカルト的なことを信じる気にはならなかった。
亜希子は深く考えるのをやめて、
〈カコ〉に付き合うことにした。
〈カコ〉の紹介で〈呪会〉に入会したのだ。
その際、入会の条件である３番目の項目、
“入会の際、一人以上、自分が呪う相手を登録すること。

そして亜希子は呪う相手に菅野好恵を選んだーーーーー。

あれから４年ーーー。
高校進学と同時に〈呪会〉のサイトにいくことも無くなった。
その存在は亜希子にとって、
過去のお遊び程度の認識しかなかった。

全国的にも有名な進学校に進学した今、
学校生活は楽しかったし、
仲のいい友達もたくさんいる。
もういじめとは無縁な明るい高校生活を送っていた。
でも、中学時代の忌まわしい思い出と共に、
亜希子は自分でも自覚のないまま、
潜在的な対人恐怖症になっていたのだ。
そのためかコンタクトレンズではなく、
黒ぶちの野暮ったいメガネをかけている。
それは自分が地味に見えるように、
他人を刺激しないようにとの願いがこもっていた。

〈カコ〉とは今でもメールのやりとりをしている。
しかし今ではそれも月に一度か二度で、
中学生の時ほど頻繁では無くなっていた。
〈カコ〉も高校に進学して、いじめはなくなったそうだった。
それだけにメールの内容も学校でのできごとや、
好きな男性アイドルのこと、最近読んだ漫画のことなど、
他愛もないことを書き連ねたものになっていた。

〈カコ〉とっても自分と同様、
もう忘れたい思い出に違いないのだと亜希子は思った。
亜希子の中でも中学時代のいじめの体験はすでに断片化され、
心の隅に追いやられている記憶の一部分に過ぎない。
もうすべては過去のものなのだ。
これからの自分には必要のない、
思い出のかけらになりつつあった。

それなのに菅野好恵は死んだ。
真夜中の駅のホームから転落して、列車に轢(ひ)かれ・・・。

遠く彼方へ追いやっていた、
忌まわしい記憶がよみがえってくる。

〈呪会〉ーーー。

呪い殺すリストーーー。

まさか”呪い”が実行されたのかーーー？

４年もたった今、なぜーーー？

いや、まだ呪いのせいだとは決まっていない。
単なる事故だという可能性の方が高いではないか。
単なる偶然、そうに違いない。

だが一方で、心の中の何かがそれを否定していた。
それが言い知れぬ不快感のようなざわめきとなって、
亜希子の心を震わせた。

（でも、もし本当に呪いが実行されたとしたら・・・？）

（私が呪会のリストに好恵の名前を書いたから・・・？）

（私のせいで・・・？）

亜希子はマンションの１階ロビーへ降りていくエレベーターの中で、
うつむき唇を噛み締めた。

第五章

「どうしたの？アッキー。浮かない顔して」
米倉里美の声で、亜希子は我に帰った。

昼休みの教室。
クラスには三分の一ほどの生徒が、
三つ四つのグループに分かれて残っているだけだった。

亜希子の通う高校は有数の進学校だけあって、
そのほとんどの学生が休み時間にもかかわらず、
辞書や参考書を開き自主的に勉強している。
中には塾の宿題をしている者もいた。

亜希子は菅野好恵の件が気になって、
ずっとそのことが頭から離れられないでいた。
それと〈呪会〉のことも・・・。

「日向ってあんなの好きなのか？」

唐突に、すこし嘲るような
ニュアンスを含んだ調子で声をかけてきたのは、
亜希子の斜め後ろの席にいる宮島祐介だった。
振り返った亜希子には顔を向けず、
だるそうに椅子に座り、
机の上に広げたパソコンの情報誌に視線を落としたままだ。

その姿はいつも学生服のボタンを３つほど開けたままで、
髪は校則で禁止されているパーマで茶髪。
それに耳にピアスを４つもつけている。
その外見と比例して
いつも挑戦的な言動と挑発的な態度をとる、
どこから見ても巷に溢れる不良学生といった少年だった。
うわさによれば他校の生徒と喧嘩して
補導されかけたこともあるという。

霞ヶ関の高級官僚を

多く輩出するこの進学校で、彼は異質の存在だった。
だがその外見・態度とは裏腹に、
成績は学年で１０位以下に
落ちたことはないという秀才でもあった。

「あんなのって何よぉ」

亜希子の代わりに言葉を返したのは里美だった。
口をとがらせて祐介をにらんでいる。

「あんな薄っぺらい歌詞をリズムに乗せて
がなってるだけの、ヘタクソバンドのどこがいいんだ？
米倉はともかく日向までがファンだったなんて驚きだな」

鼻に嘲笑するような小皺を寄せ、
口元には苦笑いを浮かべている。

「アッキー、何か言い返してあげなさいよ。この馬鹿に！」

里美が亜希子をけしかける。
亜希子はどぎまぎしながら、祐介に向かって言った。

「あ、あの・・・人の趣味を・・・
あまり中傷しない方がいいと思うけど・・・」

その時、一瞬だけ祐介が視線を上げ、亜希子を見た。
すぐにうつむきパソコン情報誌に視線を向ける。
だが、その目は情報誌のページを追ってはいなかった。

「あーつまんね」

祐介はそう言うと
パソコン情報誌を乱暴に机の中へ突っ込み、
勢い良く立ち上がった。
面白くなさそうに教室を出て行く。

その背中を見ながら里美がいたずらっぽく舌を出した。

　誰に対しても不遜な態度をとる宮島祐介だが、
亜希子にだけはいつものなりを潜めてしまうのだ。
それは里美をはじめ、
亜希子と祐介に親しい者には公然の秘密であった。

「怒らせちゃったかな・・・？」

　亜希子が不安そうにつぶやいた。

「いいの、いいの。
他ならぬアッキーに注意されたんだから、
あいつも悪い気はしてないわよ」

　里美はさも可笑しそうに笑った。
真湖と祥子も同意するように笑い出す。
　宮島祐介とは高校入学以来、ずっと同じクラスだった。
里美と祐介が同じ中学校出身ということもあり、
そのつながりで彼と知り合った。

　最初はその身なりと態度にすこし怖れを持ったが、
里美とのやり取りを見ているうちに、
今ではとてもいい人なのではと思っている。
確かによく突っ掛かって来るのだが、
最後はいつも里美に言い負かされている。
それは彼独特のすこし不器用な、
コミュニケーションのとり方のような気がした。

「あいつも煮え切らない男よねぇ。
さっさとアッキーに告っちゃえばいいのに」

　里美が示したように、
祐介は亜希子に好意を寄せているようだった。
それには亜希子もうすうす気づいていた。
それは亜希子以外の者に対する
祐介の態度が明らかに違うからだ。
他の者はともかく、亜希子には
威圧的な態度で接したことが無い。

それに亜希子に話しかける時の言葉の響きに、
どことなく優しさが含まれていることも
それを証明していた。

　亜希子自身も祐介に少なからず好意を抱いていたが、
まだ恋心とは呼べないものだった。
　里美の言葉にすこし頬を赤らめながら、
亜希子は主のいない祐介の席を見つめていた。
そんな物思いに耽っている時、
里美の心配そうな声が耳に響いた。
亜希子は親しい友人からは〈アッキー〉と呼ばれていた。
亜希子はそのあだ名を気に入っている。
その音の響きは
内向的な自分には似つかわしくないかもしれないが、
呼ばれるたびになんだか元気になれそうな気がしたからだ。

亜希子は米倉里美、
加原真湖、来島祥子の三人といることが多かった。
彼女たちは机にかじりついているようなガリ勉ではなかった。
東大を目指している生徒達がひしめく中、
普通の女子高生のように高校生活を楽しんでいる。
そんなところが亜希子をなごませてくれた。
それは中学校時代に楽しめなかった友達との時間を、
取り返しているようだった。

「あ・・・うん。なんでもない」

「なんか変だよ。今日なんかめずらしく遅刻してくるし・・・」

「ごめん。ちょっと考え事してたから・・・」

亜希子はすこしこわばった顔で里美に返事した。
里美はそんな亜希子の様子に、怪訝な表情を浮かべた。

「それならいいけど・・・。それでアッキー、
今話してたんだけどさ、クリスマスの夜に
〈シュツルムピストーレ〉のコンサートがあるのよ。

アッキーも行くでしょ？」

〈シュツルムピストーレ〉とは今人気の
ビジュアル系の４人組みのユニットで、
すこしダークなバンドカラーが若い女の子達に
ウケている超人気バンドだった。

「う・・・うん。」

　微かに微笑みながら亜希子は返事をした。
正直言って亜希子はそのバンドのファンではなかったが、
他ならぬ里美に誘われたのだ。行かないわけにはいかない。
里美、真湖、祥子の３人は入学当時からの親友だ。
明るい彼女たちといると、楽しくて時間をわすれてしまう。
それは中学時代に関わっていた、
菅野好恵達とは全く違う関係だった。
里美達といると本当の仲間だと実感できる。
特に姉御肌の里美は姉のように亜希子を助け、
気遣ってくれていた。